8/29 赤旗

当時3歳の娘と死線くぐりぬけ帰国

東京・豊島区 上田マリさん(94)

東京都豊島区の上田マリさん(94)は1946年、満州(中国東北部)から当時3歳の長女裕子さんを抱き、何度も死線をくぐりぬけ帰国しました。

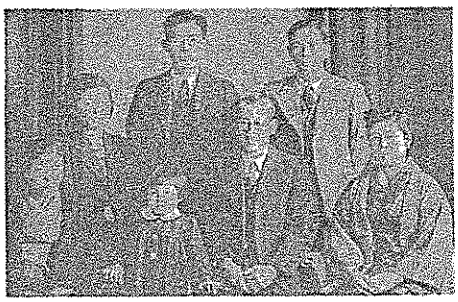
国を信じきって

41年、お見合いで結婚。夫は植民地支配をすすめるために満州に構えた国策会社・土地開発公社に勤めていました。挙式の数週間後、夫と満州の新京へ。「五族協和」「満州に王道楽土を」という「国の言葉を信じきっていました」。

社宅での暮らしは当初、物資も豊かで安定していました。やがて裕子さんが生まれます。45年8月、そんな生活は一変しました。

「新京での決戦に女子どもは邪魔だ。朝鮮に疎開せよ」と軍から命令が出ました。街中がハチの巣をつついたような騒ぎになりました。上田さんも乾パンや子どもの下着を詰めたリュックを背負い、屋根のない貨車に乗り込みました。すし詰めの車内には、生後間もない乳児を連れた母親、臨月の妊婦もいました。

南へ走ること数日。敗戦を知り、列車は新京へ戻ることに。情け容赦なく降る雨。「ねむいよ、ねむいよ」。子どもの力ない泣き声が闇夜に響いていました。



引き揚げ後、家族、両親、兄夫婦と撮影した写真。右端がマリさん

犠牲になるのは庶民

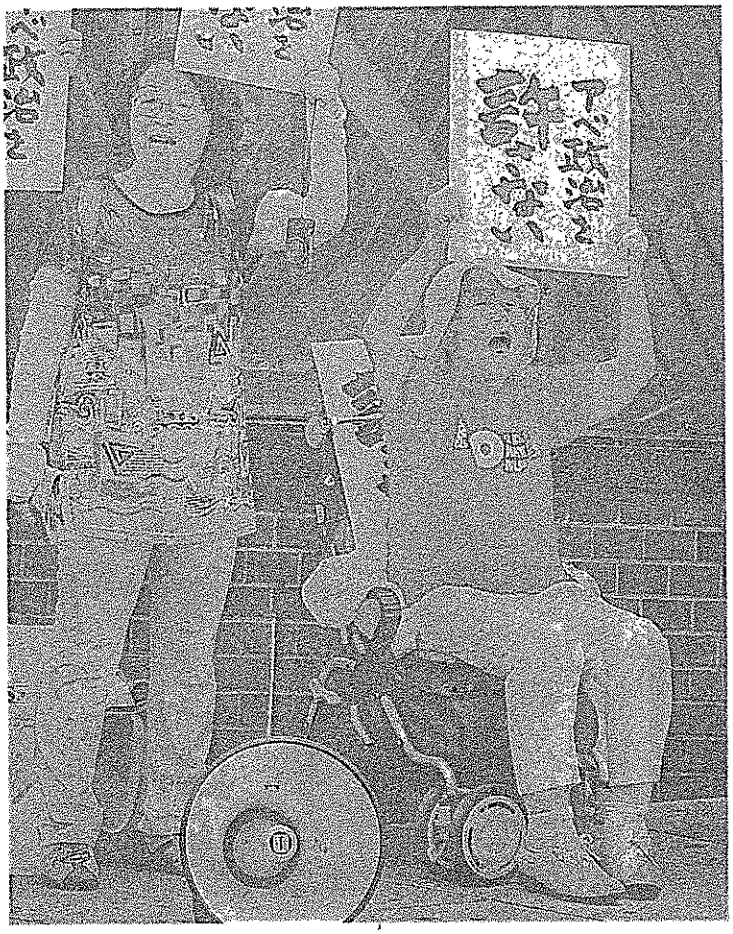
証言 戦争

途中、はしかが流行し、子どもが次々と亡くなりました。ある若い母親は、死んだわが子を手放せず、隠して抱いていました。やがて見つかり、とがめられ、名も知らぬ大地に埋葬しました。

たどりついた新京は銃声がとどろき、日本人難民であふれていました。ソ連軍の侵攻、暴民の恐怖。隣人一家は皆殺しにされました。男性はシベリアに連行され、女性は襲われました。帰国のめどは全くたたず、服や手作りの食べ物を売ってつなぐ生活。「日本人は人間ではなかった」。やがて厳冬の大地は、死んだ日本人を埋めた土まんじゅうでいっぱいになりました。

46年7月、やっと引き揚げることに。やせ衰え、虫の息となった裕子さんを抱き、港をめざして貨車を乗り継ぎ、ぬかるんだ泥道を歩きつづけました。夫と3人、故郷の地を踏んだのは9月でした。

帰国後、裕子さんもしだいに元気に。その後、一女、一男が生まれ、家族5人で戦後を生き抜きました。



街頭で「戦争法案反対」と訴える上田マリさん(右)と長女・裕子さん=東京都豊島区の巣鴨駅前

今も街頭に立つ

69年に日本共産党に入党。「あのとき、戦争に反対したのは共産党だけだった。ためらいなんてなかったわ」。今も戦争反対を訴え街頭に立ちます。

戦争法案を進める安倍政権に「開戦前に似てきた。いかに無残か、本当の戦争を知らない。戦争で犠牲になるのは敵味方なく、いつも庶民。戦争は絶対反対です」

孫5人、ひ孫4人に恵まれ、「孤蓬(こほう)」の名で俳句や短歌も詠みます。

／生命あり　ひい孫までもわれにある　幸せ胸に九条守らん／

(菅川章子)